＝資料紹介＝

斜里町・富士出土の石刃鏃遺物

村田　良介

斜里町教育委員会

はじめに

北海道東北部に異彩を放つ石刃鏃文化について、斜里町内においてはこれまでに断片的な資料しか得られていない。過去の記録などによれば、町内峰浜・日の出の２地点において、石刃鏃がそれぞれ採集されている。しかし、これらの採集遺物については現在遺物の所在が不明になっているものもあり、土器との共伴関係についても明らかではなかった。

今回紹介する遺物は、斜里町富士・土屋遺跡出土の石刃鏃遺物である。石器と土器が、量的にはおのおの数点ではあるが同一地点から採集されたということであり、非常に興味深い。現時点ではこれらの石器と土器については、共伴するという考えに立っておきたい。しかし表面採集という限られた条件であり、採集時からかなり時間を経ているということも含め、最終的な決定は今後の調査を待ちたい。

これらの遺物は、昭和54年８月に知床博物館に寄贈されたものである。しかし採集時期は昭和35年頃に遡るといわれている。当時遺跡地の土地所有者であった土屋鐶氏が畑地開墾中に採集し、その後土屋宅に保管されていたのである。

位　　置　（図１、写真１）

斜里市街地附近で斜里川に合流する幾品川は、中斜里市街地附近で支流の秋の川と合流する。この秋の川は斜里岳北麓に源を発する小河川で、斜里岳北面の丘陵地帯を下刻しながら北西方向へ流下している。土屋遺跡は、この秋の川右岸の丘陵上に位置している。標高約 130m、現秋の川河床との比高約40m を計る。附近の丘陵は斜里岳北麓の北向きの緩斜面で、遺跡附近では西側を流れる秋の川と東側の幾品川にはさまれて、北へのびる独立した細長い丘陵となっている。富士市街地より北へ約 500m の地点である。地番は斜里町字富士35番地、現在は土屋一雄氏の所有地で馬鈴薯畑として耕作されている。

遺　　物　（図２、写真２）

採集遺物は石器３点・土器片７点である。以上の石刃鏃石器群に属すると思われる遺物以外に、同地点より宇津内Ⅰ式土器破片２点も採集されている。しかし今回の紹介ではこれらは割愛した。

石器　全て黒曜石製である。1は推定全長4.2cm巾1.2cm厚さ0.3cmを計る石刃鏃である。背面には一部に礫皮面が残されており、先端部が欠損している。二次加工は主剥離面側の先端側に集中して施されている。一次加工の時の打瘤と思われる。主剥離面のわずかなふくらみが先端側に認められる。２は全長7.7cm幅2.2cm厚さ0.6cmを計る石刃である。下部は欠損している。並行する両側縁には、主剥離面側からの細かい二次加工が施されている。打面と主剥離面との角度は約 100度を計る。３は全長7.3cm幅2.2cm厚さ0.6cmを計る縦長の削器である。最下部は欠損しているが、全体にねじれたような形態を示す。両側縁には細かい二次加工が施されており、先端部ではこの二次加工面と主剥離面との角度（刃部の角度）は約90度となる。また主剥離面中央部には、短い線状の擦痕が肉眼によっても観察できる。着柄あるいは握った際に附着したキズの可能性も考えられる。

土器　全て胴部小破片と思われ、完形個体の器形を推測し得る資料は得られていない。また拓影の天地についても逆になっているものがある可能性もある。４～６は表面に幅２mm前後の条痕が、水平あるいは斜位に施されている。７・８は無文である。９・10は前者より細い条痕が施されており、９は裏面にも４～６と同じく間隔の広い条痕が施されている。４～７は淡い赤燈色を呈し、８～10は暗褐色である。胎土は全例とも、わずかに繊維およびφ１～２mmの砂を含む。９・10が他に比べて薄手である。

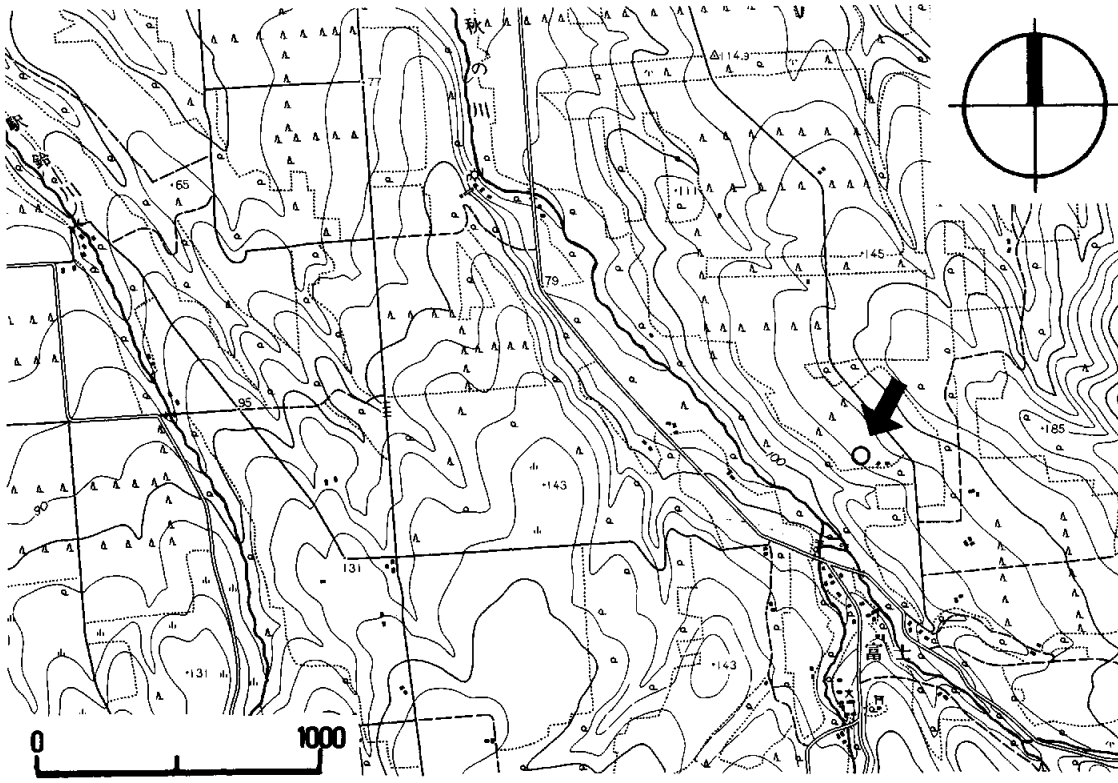


図1　遺跡位置図

写真1　遺跡近景

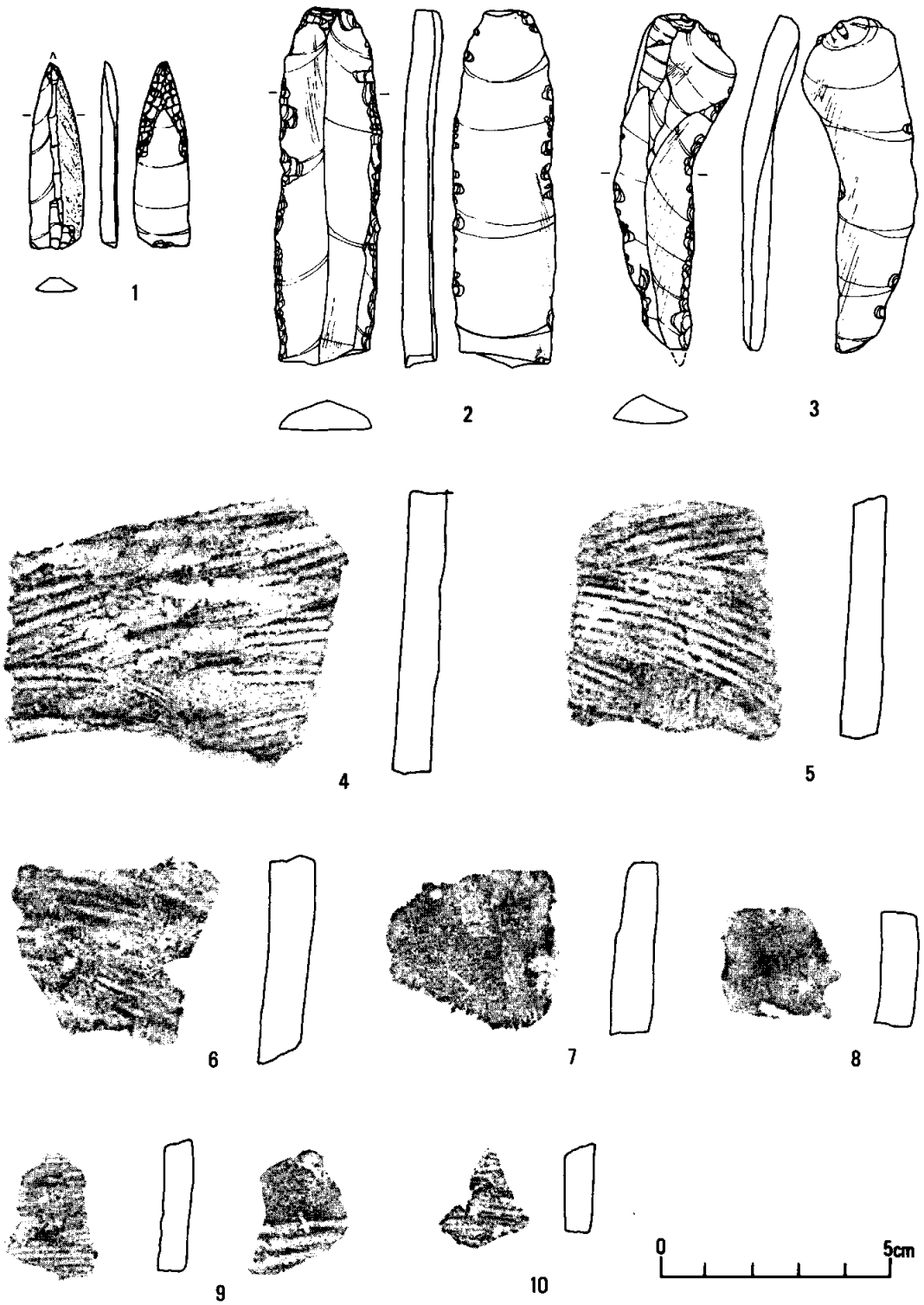
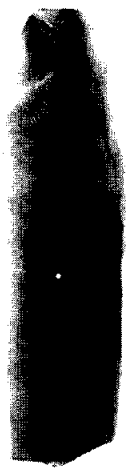
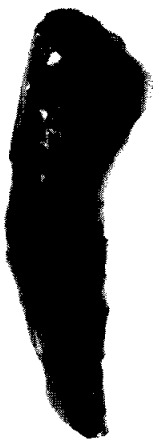
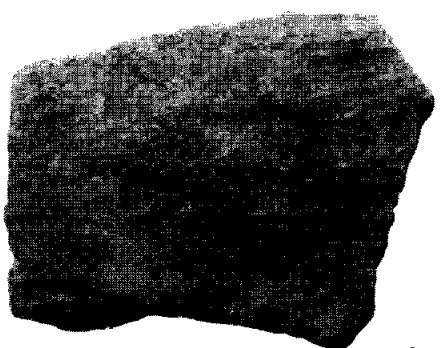


図2　出　土　遺　物

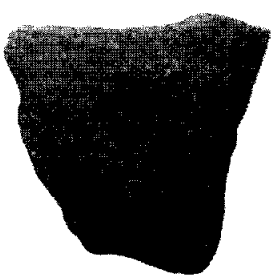
1

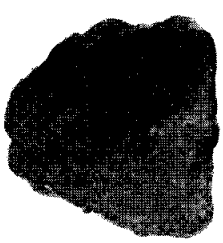

2


3


4

5


6


7

8

9

10

写真2　出　土　遺　物